

今月のポイント

- 人をつなぐためのポイント
- 「個人」ではなく「分人^{ぶんじん}」をつなぐ意識を
- 「ソーシャル・キャピタル醸成事業」にな



佐々木亮平 (ささき・りょうへい)

岩手医科大学
衛生学公衆衛生学講座助教
●連絡先：〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
019-651-5111 (内線 5775)



岩室紳也 (いわむろ・しんや)

ヘルスプロモーション推進センター
(オフィスいわむろ)
●連絡先：http://iwamuro.jp

第1回

なぜ、つながる?

連載にあたって

連載では、執筆者が地域保健、被災地支援に取り組み思いや経験を紹介するだけにとどまらず、執筆者がお互いに対して、なぜそのような取り組みを、考えをするに至ったのか。さらには読者の方に何を読み取っていただきたいのかを「ポイント」という形で文中に盛り込んでいきます。ぜひ疑問点や意見を編集部に送っていただき、一緒に考え続けられたら幸いです。

ソーシャル・キャピタルⅡ 絆(きずな)ほだし

佐々木亮平と岩室紳也は東日本大震災直後から陸前高田市の復興に関わらせていただき、被災地から発信し続けていますが、発信できていることは実は震災前から多くの人と共に考え続けてきた活動の延長線上にあることばかりではないかと気付かされています。健康日本21(第2次)で、健康寿命の延伸、健康格差の縮小のためには、生活の質、社会環境の質の向上が重要であ

り、そのために健康を支え、守るための社会環境の整備として「ソーシャル・キャピタルの向上」が、「地域のつながりの強化」が掲げられています。しかし、正直なところ、われわれは東日本大震災前にソーシャル・キャピタルの醸成を最初から意識して仕掛けた経験はありませんでした。ソーシャル・キャピタルは社会関係資本と訳され、岩室も研究班¹⁾に入っていたものの、ストンと腑に落ちてはいませんでした。震災から5年が経ちましたが、仮設住宅から災害公営住宅や新たに開発された住宅

地に転居するに当たっても積極的な交流を仕掛けるコミュニティづくり、ソーシャル・キャピタルを醸成する必要性は認識され続けており、これからの地域づくりを進めていく上で非常に重要な視点とされていきます。しかし、今後、どの分野が、どの機関が中心となって、どのような事業の名のもとに、誰と連携し、最終的にどのような完成形、絵を目指して進むべきかについては、実は混沌としています²⁾。これは震災前、人や生命、生活をつなぐためのソーシャル・キャピタル醸成事業という視点での経験が誰もなかったからではないでしょうか。

惑と感ずることもある束縛が存在するのが「真のつながりである」と気がつくことで、東北地方に古くから存在していたコミュニティこそが、「信頼」「ネットワーク」「お互い様」の3要素が揃った、ソーシャル・キャピタルが醸成されたコミュニティであったと理解できました。

①人をつなぐためのポイント

「130回も議論することはあったのか」や「どこで、どういう機会に『絆』を『きずな』に加えて『ほだし』と読むことを教えてもらったのか」という疑問が、皆さんの頭の中で浮かんだでしょう。人が発する言葉を理解しようとするだけではなく、時にはその言葉への「疑問」を含め相手に興味や関心を持つことができるかが「つながる」「つながる」「つながらり続ける」ための原点になります。相手に興味、関心を持つことがなければ、疑問も感じず、相手の言葉がここに残ることもありませんし、相手も反応がないため話した相手とつながろうという思いになれず結果としてせつかくの「つながる機会」を逸します。

Build Back Better (ビルドバックベター) に向かう

Build Back Better という言葉に込められた「Better」に大きな意味があります。ソーシャル・キャピタルが醸成されたコミュニティ¹⁾昔の束縛が多い地域に逆戻りすることとすると抵抗感を覚える人がほとんどです。実際問題として、絆を束縛や迷惑にとらえ、関係性が希薄な都会に移り住んだ人も少なくないはず。ただ、今回の震災をきっかけに絆の大切さを多くの人が実感し、緩やかな形のほだしであれば、人と人がつながり続ける環境に身を置きたいという機運が少なからずあります。

陸前高田市で展開されている「はまっつけらいん かだつてけらいん運動」も人と人がつながることの大切さを実感していた地域の皆さんから自然に出てきた考え方でした。この言葉には決して無理やりはまっつけ(参加して)、無理やりかだる(おしゃべりをする)ことを求めるのではなく、それこそできるときにはまって、話したいことをかだる中で、気が付けばところが癒されるコミュニティづくりにつながりましょうという運動です。このように、絆(きずな)

このような状況の中、佐々木と岩室は、岩室が新幹線に乗り降りする岩手県水沢江刺駅から陸前高田に向かう1時間余の車中会議でこれまでに130回以上議論を重ね続けてきましたが、このように自分の迷いを誰かと話し続けることで道筋が見えてくるものです。「絆」という漢字を「きずな」つながり、むすびつき」以外に「ほだし」手かせ、足かせ、束縛、迷惑」と読むことを知ったことで、ソーシャル・キャピタルⅡ絆(きずな)ほだし³⁾、すなわち、単につながっているだけではなく、そこにはお互い様の感情が生まれる。ある意味迷

十ほだし)を昔のような、少し言葉は適切ではないかもしれませんが、年長者や大きな声の人の意見が通ってしまうような、負担感があるつながりではない、緩やかなつながり、前よりさらに住みやすい、いろいろな人の意見が通るコミュニティに、地域に Build Back Better しようとする意味です。

経験に学んだ「人をつなぐ重要性、必然性」

まだ、ソーシャル・キャピタルの醸成という言葉が認識されていなかった1998(平成10)年に佐々木は岩手県の保健所保健師として採用となりましたが、以来、振り返れば常に人と人をつなぐ「こと」の重要性、命や生活をつなぎ続けることの必然性を多くの事業から学ばされてきました。

精神障害者の保健所デイケア(精神障害者社会復帰相談指導事業の通称)の担当の際は、それまで80年ごろ(昭和50年代後半)から続いていた保健所と当事者の支える側と支えられる側という関係性を改め、当事者による自主グループ化を当時の岩手県精神保健福祉センターと共に進めました。それまで、毎回のさまざまメニュー内容については参加メンバーで決めつつも、事前

準備や調整などは保健師が行っていたため、そのこと自体もメンバー自ら実施することができるよう進め方を変えていきました。このことを可能にしたのは、自主グループ化する過程であった毎回の話し合いの機会でした。

「ソーシャル・キャピタルの醸成」もそうですが、「自主グループ化」という大きな目標はあったものの、実際には自主グループになるということはどういうことなのか、自宅と医療機関、保健所以外のつきあい方、つながり方はどうなるのか、実際に計画したプログラムを実施するためにはどのような準備が必要で、誰が誰に声を掛け、どう管理するのか、自主グループになった後の会の運営体制はどうするのか等々、実は答えが見えている人は一人もいませんでした。だからこそ、本当に細かなことまで一つ一つ、時間をかけて話し合いを続けました。当時、月2回のプログラムでしたが、1年間はほぼ、この自主グループ化するための話し合いに当てられ、いわゆる世渡り上手教室、話し方教室と参加者みんなで愛着を込めて呼んでいた生活技能訓練(Social Skills Training: SST)を実践の中で積み重ねていったことで、最終的に岩

はいかず、時間ばかりかかり、メンバーには佐々木が担当となった途端、それまで続けてきた体制を突然変えるなんて見捨てる気なのか……と率直なご意見をいただき、メンバーと保健所内上司、そして精神保健福祉センターの板挟みのような状態に日々悩み、葛藤ばかりしていました。経験の浅い佐々木が思う自主化と、上司や精神保健福祉センター、メンバー、ボランティアが考える自主化とは、それぞれ捉え方が違ったため、話し合いによって何度も何度もすり合わせる必要がありました。なぜ、話し合いを重ねることができたかですが、「でどうするのか」というところも見えていなかったため、話し合いを重ね続け、みんなを確認し続けるしかなかったためではないかと、いま振り返ると少し客観的に考えることができます。

当時の精神保健福祉センターのスーパーバイズにより先進的に行っている当事者会の声を聞いた結果、先進的と思ったところも実は試行錯誤でやっていることを知り、コピーするのではなく、自分たちに合ったものを模索すればいいということを確認することができました。そして、話し合いとプログラム活動での経験を重ね続けるこ

とで、メンバーそれぞれの生き方やお互いの人生を見詰め直し、そのことを分かち合うことができました。また、生活技能訓練という、文字通り通称「話し方教室」の経験がベースにあったことから、困ったとき、分からなくなったとき、行き詰まったときはみんな話し合い、どう対応していけばよいか確認するという姿勢を根底に持ち続けることができたのだと思います。こうした繰り返しの中、佐々木自身も一支援者(担当)としての事業、訓練ベールの脳から、なんのために、誰のためにという本質主義の脳に変わっていくことを実感することができました。

③手詰まりだから話し合える

「当時は嫌で嫌で仕方がなかった」のは当然です。なぜならこうすればいいという答えがないとき、人はイラつき、悩み、考えることを放棄しようとし、す。しかし、ソーシャル・キャピタルの醸成方法に答えがないと割り切ることで、話し合いが可能となり、気が付けば(ここまで我慢ができるかがポイント)進むべき道筋が見えてきます。

手県内では初めてとなる保健所デイケアからの自主グループ化につながる事ができました。

②ポイントは答えや方法論を求めないこと

佐々木は書きながら「自主グループ化」や「生活技能訓練」という取り組み、経験の紹介を重視していましたが、岩室の関心事は「どうして毎回の話し合いの機会を設けたのか」「誰が、なぜそうしたのか、できたのか」「保健所デイケアと自主グループ化の違いは何か」でした。

話し合う必然性

このとき、佐々木は採用2年目でこの事業を担当しましたが、苦しく、嫌で嫌で仕方がありませんでした(笑)。多くの人がいるんな事業で実感されていると思います。自主グループ化以前は、固定化されたメンバーの長期参加やプログラムのマンネリ化などの課題が挙げられ、それを打破すべく話し合いを重ねても、なかなかうまく

ソーシャル・キャピタルの醸成で活性化を

固定化やマンネリ化が起る理由をソーシャル・キャピタルの構成要素である、「信頼」「お互い様」「ネットワーク」という視点²⁾で分析すると、まずは新しい風を「信頼」する土壌も、雰囲気がないことに気付かされます。それこそ声の大きい人の声を通してしまい「お互い様」の意識が薄れ、「ネットワーク」もほころび始めます。一方で、話し合いが続くという状態では、メンバーも、ボランティアも、スタッフも、行政も、自ら考えようとする意識に変容し、自分の役割や責任が自覚でき、できる人ができることをという意味で自主性が生まれ結果、お互いを「信頼」できる状況になっていました。話し合いの結果として、一人一人がお互いの気持ちを理解し合い、仲間意識が強化され、「お互い様」の機運が盛り上がりました。それまでどちらかと言えば他人(ひと)任せであったのが、他人任せでは何も進まないという住民自治、自らが主体となった、狭い意味でのまちおこしの機運が盛り上がりました。このようにソーシャル・キャピタルの醸成は健康以外

の効用があると実感できました²⁾。

佐々木は自主グループ化した後もこの当事者による活動を見守り続けました。自主的に活動することについてメンバー間でも事前にイメージを共有できていたつもりでしたが、自主化1年目の現実は厳しく、上手に進むことの方が少なく、想像以上に難しいものであったのも事実でした。それでも保健所として一緒に考え続ける姿勢を崩さずに関わり続けた結果、少しずつメンバーは自分たちで実施することの意思が確実なものになっていき、活動形態等を変えながらも自主的な活動が継続されていきました。このような取り組みこそがソーシャル・キャピタルの醸成だったのだと、約20年前のことですが今回の原稿を書くことで気付かされました。

④ 自主グループも小さなソーシャル・キャピタル

精神保健福祉の先進地から見れば、「自主グループ化もできていなかったのですか？」や、後発地から見れば「もっと先進的なのところに学ぼう」という思いが生まれるかもしれません。しかし、その地域の、そこに暮らして

いる一人一人が「信頼」「お互い様」「ネットワーク」を作り上げるプロセスこそが、そこでのソーシャル・キャピタルの醸成の礎になり、それを維持し続けるために関わり続ける姿勢が求められていることを教えてくれた事例です。

「個人」ではなく「分人」を緩やかにつなぐ意識から

人と人をつなぐネットワークづくりの経験がある人でも、ある程度まで進んでもその先に広がらないと行き詰まり感にぶつかります。「こんな活動には興味はない」と思っている人をどんなに熱心に誘ってもなかなか乗ってきません。このような壁にぶち当たっていたときに「個人」と「分人」という考え方に会いました。

個人とは「individual」、すなわち分ける(divide)、分解することができない存在と考えられています。実は個人とはいろいろな側面をもった分人の集合体だという考え方がありました⁴⁾。あなたの働きかけで相手の人が変われたときを思い出してください。その「個人」の全てではなく、その人

ソーシャル・キャピタル醸成事業ってありますか

の中の「分人」、すなわち、あなたと共通した関心事が見つかった「分人」と出会えたときには話が弾み、結果的にその人が変わったのではないのでしょうか。ソーシャル・キャピタルの醸成の際にも、「個人」を巻き込もうとしても、上手くいかないことが多いのですが、その人と話し合う中で、その人の中の「分人」の一つとでもつながることができれば、その人との関係性、信頼、お互い様が育まれ、緩やかにソーシャル・キャピタルⅡ絆(ぎずな+ほだし)の醸成が進みます。ソーシャル・キャピタルの醸成のポイントは「分人」探しという視点を持つことができるか否かのようなのです。

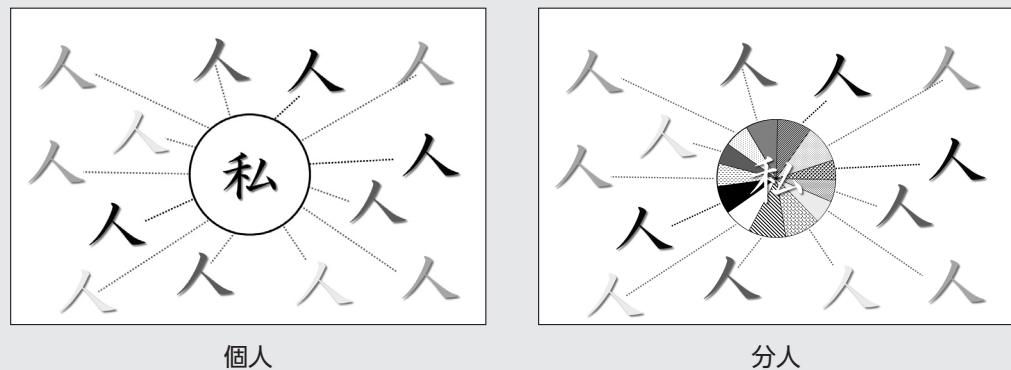
⑤ 他分野との交流が広がり原点

「分人」という考え方を教えてくださったのは、岩室が浦安市の市民大学で一緒にさせていただいている「自治」を専門としている政治学者でした。住民自治の視点で市民と行政の協働を考える際に、「一人一人の市民をどうとらえ、どうネットワークづくりを進めるといいかを考える中で参考にされていることでした。」

国全体の大きな方向性としてソーシャル・キャピタルの醸成が必要、地域づくりは重要と確認されていますが、実際「事業」や「予算」が職場、組織、事業の中になんかために積極的に取り組めない実情があります。ソーシャル・キャピタル醸成事業という枠組みがないと、人は目の前のことをこなすことに追われ、大きな目標に立ち返ることは至難の業です。だからこそ、ソーシャル・キャピタルの醸成自体を「事業化」し、事業、業務、仕事として捉えれば、分からないなら分からないなりに周囲と一緒に考えて考えやすいのではと考えました。

佐々木自身、若く経験の浅かった時代は何かを施し、目に見える直接的な支援を行うことが保健師という支援者として当然の姿だと考えていました。自主グループ化の結果、ただ隣に座っているだけでもいい、そして話を聞いたり、話し合ったりする環境をつくるのが誰かの力となり、ケアにつながるという新しい価値観に発展した瞬間も経験させてもらいましたが、その時点ではまだソーシャル・キャピタル醸成の

図 個人と分人の違い



「脳」にはなっていないませんでした。担当した精神障害者の自主グループ化という事業も実はソーシャル・キャピタルの醸成につながる事業だったのだと理解できるようになるまで20年近くかかりました。

連載では、皆様もどのような事業に「ソーシャル・キャピタル醸成事業」という冠を付けることができるのかに焦点を当てながら考え続け、語り合い(それぞれの地域の文化で、「はまってけらいん、かだつてけらいん」しながら)、仲間と一緒にソーシャル・キャピタル醸成事業「脳」になっただければと期待しています。

参考文献

- 1) 平成26年度厚生労働科学研究(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「地域保健対策におけるソーシャルキャピタルの活用のあるり方に関する研究」. http://www.jpha.or.jp/sub/menu04_10.html
- 2) 佐々木亮平, 岩室紳也. 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは～ソーシャルキャピタルの醸成は誰の仕事?～. 月刊地域保健, 2015, vol.46, no.8, p.56-61.
- 3) 佐々木亮平, 岩室紳也. 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは～「日本公衆衛生学会(長崎)シンポジウム 大規模災害から健やかな日常生活への円滑な復興にむけて」から～. 月刊地域保健, 2015, vol.46, no.12, p.56-61.
- 4) 平野啓一郎, 私とは何か～「個人」から「分人」へ～. 講談社, 2012.